

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00002

研究課題名（和文）和解の政治哲学 後期ロールズにおけるヘーゲル主義の解明

研究課題名（英文）Political Philosophy of Reconciliation: Hegelianism in the late Rawls

研究代表者

佐山 圭司 (Sayama, Keiji)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80360965

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：1985年の論文「公正としての正義—形而上学的ではなく、政治的な」は、ロールズ
の思想発展にとって大きな転換点と見なされてきた。この「転回」は、ロールズ支持者に少なからぬ反発と失望
を引き起こしたが、リチャード・ローティは、これを積極的に評価し、従来のロールズ解釈において過小評価さ
れてきた「ヘーゲル的な要素」に注意を促した。

本研究は、ローティのこうした指摘を受けて、ロールズにおける「ヘーゲル的な要素」を発掘し、後期ロールズ
の構想をヘーゲルの政治哲学との関連で再構成した。具体的には、ロールズがヘーゲルから学んだ「和解」の思
想に着目して、後期ロールズの正義論を「和解の政治哲学」として再解釈した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のロールズ研究においてほとんど考慮されてこなかった「ヘーゲル的な要素」に着目し、しばし
ば否定的に捉えられてきた後期ロールズを、これまでとは違ったパースペクティヴから描き出すことができた。
具体的にいえば、ロールズがヘーゲルから学んだものが、「和解」の思想であることを明らかにすることで、本
研究は、後期ロールズの正義論を「和解の政治哲学」として再構成することができた。さらにロールズとヘーゲ
ルとの関係に新たな光が当てられることで、カントの道徳哲学やミルの自由論とは対照的に、現代の政治哲学に
おいてほとんど忘れ去られているヘーゲルの法哲学を再評価することもできた。

研究成果の概要（英文）：John Rawls' essay "Justice as Fairness: Political Not Metaphysical," (1985)
has been regarded as a turning point in the development of his thought. This "turn" caused
considerable backlash and disappointment among Rawls's supporters, but Richard Rorty positively
appreciated it and called attention to the "Hegelian element" that has been underestimated in
conventional interpretations of Rawls.

In response to Rorty's suggestions, this study unearthed the "Hegelian elements" in Rawls and
reconstructed the conception of the late Rawls in relation to Hegel's political philosophy.
Specifically, it focused on the idea of "reconciliation" that Rawls learned from Hegel, and
reinterpreted Rawls's late theory of justice as a "political philosophy of reconciliation".

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ロールズ ヘーゲル 政治哲学 和解

1. 研究開始当初の背景

ロールズとヘーゲルとの関係を本格的に論じた研究は国内外ともに、わずかな例外を除いて、ほとんど存在していない。両者の類似性を論じた先駆的業績として、シュビル・シュヴァルツェンバッハの「ロールズ理論におけるヘーゲル法哲学的特徴」(1992年)、ロールズの影響下でヘーゲルの社会哲学を「和解」の思想から読み解いた労作として、マイケル・ハーディモンの『ヘーゲルの社会哲学 和解のプロジェクト』(1994年)が挙げられるが、これらは後期ロールズの主要著作である『政治的リベラリズム』や『公正としての正義 再説』の刊行以前に執筆されたもので、ヘーゲル解釈の全体像が示された『道徳哲学史講義』も活用されていない。

2. 研究の目的

1985年の論文「公正としての正義——形而上学的ではなく、政治的な」は、ロールズ思想発展にとって大きな転換点と見なされている。この「転回」は、リベラリズムの哲学的基礎づけの放棄として、しばしば否定的に評価されてきた。本研究は、「転回」を積極的に評価したローティの示唆を受けて、ロールズにおける「ヘーゲル的な要素」を発掘し、後期ロールズの構想をヘーゲルとの関連で再構成しようと試みる。具体的には、カント主義者として知られてきたロールズが、ヘーゲルに近づいた理由を当時の社会的・思想的コンテキストから解明し、ヘーゲルへの接近と1985年の「転回」との関連を検証する。さらに、ロールズがヘーゲルから学んだ「和解」の思想に着目して、後期ロールズの正義論を「和解の政治哲学」として再解釈し、その今日的意義を探る。

3. 研究の方法

テキスト解釈にもとづく思想研究であるかぎり、関連文献の収集・読解が発点になる。地方の研究機関に所属する応募者は、文献調査・収集において大きなハンディがあるが、インターネット等をフル活用する一方で、国内外の拠点大学の図書館で定期的に収集を行うことで、これをカバーする。そして収集・読解した文献によって得られた知見や成果を学会や研究会などで積極的に報告し、他の研究者との討論を通じて研究を深めていく。

4. 研究成果

このような意図と構想をもって始まった本研究であったが、2020(令和2)年から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延により、当初の計画通りに研究を進めることが事実上不可能となった。他の大学と同様に勤務先大学でも、対面授業に代ってオンライン授業を実施することになり、授業準備や学生指導に通常の倍以上の時間と労力を割かなければならなくなった。研究においても、長期間にわたって国内旅行や海外渡航が制限もしくは禁止され、また国内外の大学では、学外者の図書館利用が禁止もしくは大幅に制限されたため、研究文献の調査・収集は実質的に不可能となってしまった。

たとえば、2020(令和2)年2~3月には、アメリカ合衆国で集中的な資料収集を予定していたが、合衆国は入国禁止となり、すでに予約・購入していたフライトをキャンセルせざるをえない事態にいたった。その後2023(令和5)年に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に引き下げられるまで、図書館や研究機関を訪問して研究文献を調査・収集することが不可能な状態が続いた。研究期間を延長することで、当初の研究計画を実施しようと試みたが、文献収集や海外研究者との直接的交流が不可能になったため、当初の予定を変更・修正せざるをえなくなった。

そこで、研究歴の浅いロールズから始めることを断念し、研究遂行に十分な研究文献をもっているヘーゲルから出発して、ロールズに向かっていくことにした。出発点にしたのは、ヘーゲルの「和解」概念の解明である。この概念は、『法哲学要綱』の序文に登場する「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」という言葉とともに、晩年のヘーゲルの現実妥協的な性格を示すものとして、否定的に論じられることが多かった。しかし、悪名の高いこの言葉も、ヘーゲル哲学の核心を示すものであり、これをヘーゲル哲学全体との関連において解明しなければならぬ。ロールズが、「和解」をヘーゲルの政治哲学の中心概念とみなしている以上、何よりもヘーゲルの「和解」概念を適切に理解することが、研究の前提となるからである。

しかしながら、この概念と本格的に取り組むとなると、それだけで本研究が終わってしまうため、ヘーゲルが「和解」概念の説明のために用いた「十字架と薔薇」という比喻を内在的に解明したゲオルク・ラッソン(1862年~1932年)の論文「十字架と薔薇」を手がかりに、ヘーゲ

ルの「和解」思想の解明に努めた。刊行した研究成果報告書の第1章はその成果である。

一方、ロールズ研究から見ると、彼の政治的リベラリズムをヘーゲルの「和解」と関連させて論じている文献は、思いのほか少ない。その理由はいくつか考えられるが、リベラリストとして知られるロールズを、リベラリズムの批判者として知られるヘーゲルと結びつけることへの違和感がまず挙げられよう。おそらくその違和感は、ロールズ研究者だけでなく、ヘーゲル研究者にもあり、ヘーゲル研究に携わってきた研究代表者も、ロールズのような「カント主義者」が、カント主義的な先入観なしにヘーゲルの哲学を理解できるのか、いささか疑問に思っていた。

しかし、実際に『道徳哲学史講義』のヘーゲル講義を子細に検討してみると、ロールズは、第二次世界大戦後のヘーゲル研究の水準をふまえて、かなり適切な評価を下しており、さらに彼自身の解釈にもとづいて、ヘーゲルの政治哲学を自らの政治的リベラリズムに取り入れていることが明らかになった。とはいえ、ロールズのこの試みは、これまで正当に評価されてきたとは言いがたい。そもそも、彼自身が積極的に打ち出している「和解」概念にたいして十分な注意が払われてこなかった。

マイケル・ハーディモンのようにロールズのもとで学んだヘーゲル研究者を除けば、英語圏においてこのテーマを正面から論じる者は、ほとんどいない。これにたいして、ロールズの「和解」思想に関心を示したのは、ヘーゲル哲学の故郷であるドイツ語圏の研究者であった。とりわけ注目に値するのは、イェルク・シャウプの『和解としての正義 ジョン・ロールズの政治的リベラリズム』である。そこで、研究成果報告書の第2章は、ロールズのヘーゲル講義とシャウプの著作を中心に、ヘーゲルとロールズの「和解」思想を解明した。

だが、ロールズは、「和解の政治哲学」のリスクも十分認識していた。彼は、『政治哲学史講義』で次のように語っている。「政治哲学は、不正で褒められない現実をたんに擁護するという危険に用心しなければなりません。というのも、もし政治哲学が現実のたんなる擁護になるとしたら、政治哲学は、マルクスが言う意味でのイデオロギー（虚偽の思考枠組み）に成り下がってしまうからです」。つまり、ロールズは、「和解の政治哲学」を唱えたヘーゲルになされてきた批判が、自らの政治的リベラリズムにも向けられうることをよく自覚していたわけである。

さて、ヘーゲルの『法哲学要綱』の先進性を高く評価しつつも、その現状追認的な性格を鋭く批判したのが、青年マルクスであった。マルクスの批判は、やがてイデオロギーを生み出す資本主義的社会構造へと向けられていくわけだが、「和解の政治哲学」を掲げるロールズは、マルクスの批判にいったいどう答えるのか。研究成果報告書の第3章は、ロールズの『政治哲学史講義』のマルクス解釈を手がかりに、この問いに迫った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐山圭司	4. 巻 66
2. 論文標題 ジョン・ロールズのマルクス解釈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学年報（北海道哲学会）	6. 最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐山圭司
2. 発表標題 竹島あゆみ『承認・自由・和解ーヘーゲルの社会哲学』合評会
3. 学会等名 日本ヘーゲル学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐山圭司
2. 発表標題 ジョン・ロールズのマルクス解釈
3. 学会等名 北海道哲学会・北海道大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 加藤泰史、佐山圭司ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 405
3. 書名 スピノザと近代ドイツ 思想史の虚軸	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------